

等が検出されないことから否定される。土中に含まれる鉄分が水によって土壌内に運ばれ、酸性土に触れて酸化し、酸化鉄として底面に付着あるいは浸透したという考えは、赤変部分を有する遺構とない遺構との自然的条件（位置、深さ、掘り込み面）において差異が認められず、説得力に欠く。

このように見えてくると、赤色液体の浸透という可能性が強くなってくるが、そのようなものが存在するのであろうか。自然、人為両面からの追求を続けたい。

(三ヶ田俊明、秋元信夫)

3. 野中堂環状列石周辺の遺構

今回発掘されたB区は、野中堂環状列石外縁より北東方向へ約11mの位置にある。このような野中堂環状列石近傍は、過去、断続的にではあるが調査が行なわれている。

昭和17年の調査では、野中堂環状列石北側外縁より10.9mの地点に、人為的に埋め戻されたフ拉斯コ状土壌が1基検出されており、この土壌内より多量の土器片が出土したとある。また位置ははっきりしないが、野中堂環状列石の南側及び西側外縁近傍に設けられた3ヵ所の試掘坑の中の1ヵ所からフ拉斯コ状土壌が1基検出されている。

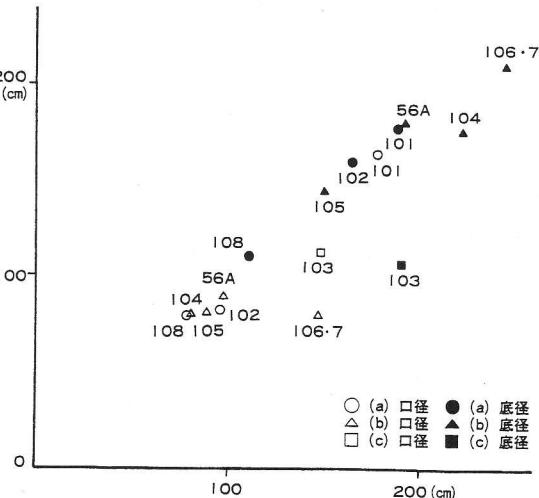
また、昭和56年の便所増築に伴う調査では、土壌、フ拉斯コ状土壌各1基が検出されている。このフ拉斯コ状土壌内より、1個の復元土器、多量の土器片や石器、また、土偶、耳飾り、鐸形土製品、円盤状土製品、ミニチュア土器各1点を出土している。

今回の調査結果と昭和56年の調査結果より、フ拉斯コ状土壌について若干検討してみる。なお昭和56年調査のフ拉斯コ状土壌を便宜的に56Aとする。また、遺構の分布には昭和17年の調査結果をも資料として使用している。

(1) 形態・規模 (第103図)

検出されたフ拉斯コ状土壌は、土壌底面に施設をもつものが多い。

- a. 土壌底面中央に小ピットをもつもの… 101・102・108
 - b. 土壌底面に段差をもち二段構造となるもの 104~106・107, 56A
 - c. 土壌底面が平坦なもの 103
- 口縁、底径は底面施設による違いは認められない。口径は79~96cmのものが多く、最大となるものは101号フ拉斯コ状土壌で170×164cmを測る。底径、深さはばらつきがあり規格性は認



第103図 フ拉斯コ状土壌の口径・底径相関図

めにくい。

土壙底面に小ピットをもつ例として、秋田県館下Ⅰ遺跡、杉沢台遺跡、青森県小金森遺跡、螢沢遺跡などがある。

(2) 堆積状況

- a . 人為堆積を呈するもの 102~106・107, 56A
- b . 自然堆積を呈するもの 108
- c . その他 101

101号フラスコ状土壙は、下層部（8～15層）は自然堆積、上層部（1～7層）は人為堆積を呈する。土層断面より鍋底状のプランを思わせる1～4,6層の土質はよく似ており粘土粒を多量含む。また、1～4,6層から出土した土器と7層から出土した土器とは時間差がみられる事などより、再利用と考えられる。人為堆積を呈する土壙は一時期に埋め戻されたものと考えられる。

(3) 遺物及びその出土状況

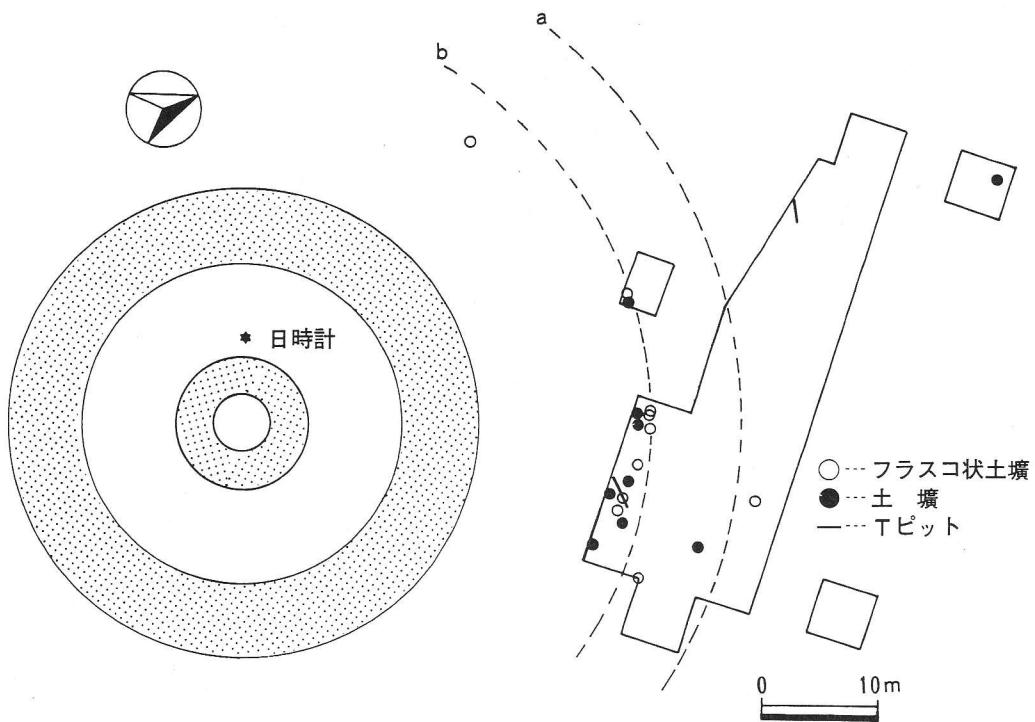
多量の遺物を出土する土壙（101～106・107, 56A）と少量の遺物を出土する土壙（108）とがある。前者は、土器、石器の他、土偶、耳栓、土製装飾品、鐸形土製品、環状土製品、円盤状土製品、岩板、円盤状石製品などの土製品、石製品の出土があるのに対し、後者からの土製品、石製品の出土はない。

101号フラスコ状土壙の出土遺物は、再利用されたと考えられる1～4, 6層に集中する。また、104号フラスコ状土壙底面の一段低くなっている所より、まとまって3個の復元可能土器が横転状態で出土した。

(4) 性格

フラスコ状土壙の用途は、貯蔵施設、土壙墓、冬期間の簡易住居、祭祀施設など諸説がある。秋田県館下Ⅰ遺跡、梨木塚遺跡、古館堤遺跡、萱刈沢遺跡などでは、土壙内より炭化した稲、クルミなどを出土している事、柱穴状ピットが土壙の周囲から検出され上屋構造をもつと考えられる事、土壙口縁部に蓋をしたと考えられる事などより、貯蔵施設と考えている。秋田県萱刈沢、梨木塚遺跡、青森県小金森遺跡、螢沢遺跡などでは、人骨、副葬品の出土、ベンガラの散布、堆積状況などより、土壙墓と考えている。また、青森県泉山遺跡、大石平遺跡などでは、堆積、遺物出土状況、規模などより、呪術的祭祀施設と考えている。このようにみていくと、フラスコ状土壙の用途は限定されるのではなく、遺跡の性格、環境、時期などによって、使用目的を異にするものと考えられる。

では野中堂環状列石周辺におけるフラスコ状土壙の性格であるが、積極的な資料に乏しく決定できるまでに至らない。しかし、101～106・107, 56Aは人為的に埋め戻しが行なわれている事、これらの土壙内から土器、石器の他、土製品、石製品など直接生活用具と結びつかないと



第104図 野中堂環状列石周辺の遺構分布図

考えられる遺物が多量出土する事、今回の発掘区より住居跡が検出されなかった事などより、単に貯蔵施設とは言いがたい。

(5) 遺構の分布

104図は、今回の調査結果、昭和17年、56年の調査結果をもとに作成した遺構分布図である。この図からわかるように、これらの遺構は野中堂環状列石を中心とする同心円状に分布する。水野正好氏は、「縄文時代集落の基本構造とは、中心に円形広場を配置し、その外周縁に居住域を配置し、さらに外周に廃棄域をめぐらすという円心円構造をもつ。野中堂遺跡の場合、内帶外径の3倍、 $1:3$ が外帶外径、外帶幅は内帶外径の $\frac{1}{2}$ 、内帶内中心部径に等しい。居住域圏の圏域幅は円形広場の $\frac{1}{2}$ でめぐることが予測される。恐らく円形広場1に対し居住域圏1、 $1:1$ の構造をもつ集落であると考えられる」と述べている。破線aは外帶外縁から外帶径の $\frac{1}{2}$ の距離で、水野氏のいう居住域圏である。この範囲内にほとんどの遺構が分布し、その記述と合致する。また遺構の集中する範囲を表わしたもののが破線bであるが、これはちょうど外帶外縁から破線aまでの $\frac{2}{3}$ にあたる。このようにこの圏域は、遺構の密になる部分と疎になる部分とに分割できる様相を呈している。

(佐藤 樹)